

◎令和4年度 入学式式辞 高校

ここ太平台も色鮮やかな花々に包まれ、春の香りが満ち溢れる春爛漫の今日の佳き日に、國學院大學栃木学園理事長 川福基之先生をはじめ、父母会会長 船田典子様、学園本部の方々、ご父母の皆様のご臨席を賜り、第63回国學院大學栃木高等学校入学式を挙行できますことは、本校にとってこの上ない喜びであり、関係の皆様方には心より御礼申し上げます。

413名の新入生の皆さん、入学おめでとうございます。教職員一同、皆さんの入学を祝福すると共に、心から歓迎いたします。また、これまでお子様を温かく支えてこられたご父母の皆様、特にこの2年間は、コロナ禍で様々なご苦勞があったかと思えます。それだけに立派に成長されたお子様の姿に、感激もひとしおのことと拝察いたします。お子様のご入学、誠におめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。

さて、皆さんは9年間の義務教育を終え、自らの意志で本校を選びました。その本校ですが、まずは私学であるということをお自覚して下さい。私学には建学の精神があります。本校は付属校として國學院大學の建学の精神を自らの建学の精神として掲げてきました。國學院大學の前身である皇典講究所は明治十五年に設立されましたが、開齋式に臨まれた総裁 有栖川宮 幟仁親王の告諭において述べられた「国体の講明」と「人格の陶冶」、つまり「日本の伝統や文化を深く学び、日本人としての良識や道徳心を持った日本人になる」ということが、建学の精神となっています。それをもとに表したものが、「たくましく 直く 明るく さわやかに」の校訓です。本校は、この校訓を理想の生徒像として今日まで約60年間ひたすら教育実践を行ってきました。ですから、皆さんが新鮮な気持ちで入学式に臨んでいる今こそ、この教訓をしっかりと胸に刻み、「よし、頑張るぞ」という決意を固め、新たな一歩を踏み出してほしいのです。

では、これから学園生活を送る上で、皆さんに望むことをいくつか述べたいと思います。まず、昨年度の卒業生が3年前、入学するにあたっての抱負を書いた作文の一節を紹介します。「私はラグビー部に入部し、一軍メンバーとなり、花園全国大会でベスト4以上の結果を残すことを目標にしました。『生まれながらにして持つ才能、能力は練習の積み重ねでしか開花しない』ことを胸に刻んで練習に励み、ワールドカップでの日本チームの活躍と同様に、私もたとえ格上と言われる相手でも互角に戦い、勝ちたいと思います」、そして彼がレギュラーとなった3年後、チームは全国大会で栃木県の高校ラグビー界の歴史を塗り替える準優勝という快挙を成し遂げました。しかも、実績・体格に勝る相手に勇敢に立ち向かっていく「ひたむきな」選手たちの姿に、関係者は元より全国から賞賛の声が多数寄せられたのです。

また、彼はこうも書いていました。「学力をつけて全教科で良い成績をあげ、常に学年上位の順位に入ることに、そのために彼は、寮生活で自分で身の回りのことをしながら、3年間必死になって勉強、夜中まで勉強している姿をよく見かけた寮監から聞きました。私が本校の生徒を誇りに思うことの一つは、真面目に学習に取り組み、よく努力することです。朝も早くから、中には始業2時間前に登校し、教室や自習室で学習したり、放課後も学園教育センターで閉館時間の夜8時半まで学習している生徒も少なく

ありません。彼もよく努力をしていた一人でした。その結果として成績優秀者として表彰され、卒業後、希望通りの道へと進んで行ったのです。

やはり、夢は叶うもの、叶えるものです。皆さんには一人ひとり優れた個性があり、鍛えれば大いに伸びる可能性が秘められています。高い志を持って、この可能性に精一杯挑戦し、その優れた能力を開花させてください。本校教育の根本は、「頭の力 心の力 体の力」の三つの力をバランス良く鍛える「鍛える教育」です。それは皆さん全員が大きな可能性を持っていることを信じ、しっかりと鍛え伸ばすということを実践していく教育なのです。もちろん、途中には様々な困難が待ち受けているでしょう。目標が高ければ高いほど乗り越えるべき壁は高くなります。しかし、すでに皆さんは、大きな試練を経験し、打ち克つてきました。2年以上に渡ってのコロナ禍の中、不安や緊張を感じながら学校生活を送ってきました。多くのことが失われ、我慢の日々であったと思います。それでも挫けることなく一生懸命に受験勉強に励み、今日という日を迎えたわけです。高校にも共に学び、そして共に悩み、喜ぶ仲間がいます。常に励まし、寄り添う私たちがいます。安心して学び、そして様々なことに全力で取り組んでいってください。先ほどの先輩もこう書いていました。「これから始まる3年間は、何が起こるか分かりませんし、大きな壁にぶつかるかもしれません。しかし、決して諦めず、その壁を乗り越えてみせます」、その気持ちを後輩の皆さんは、ぜひ受け継いでください。

そして、もう一つ、先輩の三つ目の抱負です。それは「たくさんの友達を作ること、そのためには信頼されるように決して人の悪口を言わない、常に正直に接する、相手が大切にしているものを自分も大切にすること」ということでした。人は決して自分一人だけで生きているわけではありません。支え支えられて存在しているのだということを知る必要があります。皆さんの知らないところにも様々な人生があります。皆さんの知らない人生もまた、かけがえのないものです。自分を大切にし、他人を思いやる心、助け合い、支え合う心、家族、友人など自分を支えてくれている人たちへの感謝の気持ちを決して忘れずに生活してほしいと思います。そうして互いをよく理解していくことにより、一生の友人を得るのも、まさにこの時期であると言えます。

ところで、皆さんがこれから生きていく時代は、グローバル化の進展や人工知能の飛躍的な進化など、激動の時代と言われています。あるアメリカの学者によれば、子供たちの65%は将来、今は存在していない職業に就くとされ先行き不透明とも言われています。さらに現代は、コロナ禍をはじめ、環境破壊、地域間格差、国際紛争など、人類全体の課題が複雑さと深刻さを増す現実にも直面しています。では、そのような時代を「どう生きていけばよいのか」、豊富な知識、先を見る眼、柔軟な考え、伝える力なども必要ですが、人としての心の有り様が何より大切であると考えます。皆さんは中庭の銅像を見たでしょうか。その銅像は初代学校長の佐々木周二先生です。先生は若い頃病気を患い、学校の卒業が何年も遅れたり、ご両親を早くに亡くされたりと、多くの苦労を経験されました。そうした人生を歩んでこられた先生が、当時の生徒たちに説いた言葉です。「人生の土台を築くこの今、損をしても、裏切られても、いわゆる利口者から見れば回りくどい道だと思おうような『感謝』、『親切』、そして『誠実』、『正直』な

どの大道（だいどう）を、一步一步自分の足で歩いてほしい。やがてこの道が一番近い道であり、人生これに優るものはないことを知るであろう」。この言葉のように人として大切なことを、人として正しいことを、しっかり貫いていくことが、やはりいつの時にも、どのような時代にあっても普遍的で生き方であると思います。皆さんには、若者らしく真っ直ぐな生き方をしてほしいということを、もう一つお願いしておきます。

さあ、新入生の皆さん、いよいよ國學院栃木の生徒としての第一歩を踏み出しました。これから自らを鍛えに鍛え、将来、大きく羽ばたいていくための土台をしっかりと築いて下さい。皆さんの高校生活が、実り多く豊かなものになることを心から願い、式辞といたします。

令和四年四月六日
國學院大學栃木高等学校
校長 青木一男